

= 救え

早く！
早く見つけなきゃいけないのに！
もう時間が無いのに！
どこにいるの！？

「やっと…やっと見つけた…」
「遅くなってごめんね……………楓さん」

=====

=====

PeeePuuuuu!!

「なっ！何！？警報！？」

「スマホからじゃなく部室内に仕掛けが！」

「園子のやつ、今回も手が込んでるなー」

Paaaaaa!!Paaaaan!!

『御機嫌よう諸君……』

君たちの仲間の高嶋友奈は、このダークネス園子 DX しーずんと うー…が預かった

返してほしくば、精々戦力を集めて来るんだなハーッハッハ！！「タスケテー」ブツ

「おのれ、ダークネス園子 DX SEASON 2！！」

「今度は友奈か！くそっ、またしても私は！」

「ぐんちゃん、若葉ちゃん、私ならここに居るよ…？」

「みーちゃん！みーちゃんはどこ！？」

「私はここに居るよ、うたのん！」

「無事だったのね！」

「うたのーん！」「みーちゃ——ん！」ヒッ

「はぁ……最近、楓さんが餌をあげなければ割と大人しかったのに…」

大人しかった…？乃木が…？私は重大な何かを見落としている…？ぶるぶる…」

「ダークネス園子♪ダークネス園子♪」

「おお、これが噂に聞くダークネス園子。お手並み拝見させて貰おやないの」

「あら…？友奈ちゃんも高嶋さんも居るのに、さっきの放送…」

「友奈がいない…！」

「赤嶺か…」

「いいえ。

似ていたけど、あれは友奈の声ではなかった。誰を騙せてもこの弥勒の目だけは欺けない」

「千景や東郷みたいな芸当を…というかそれを言うなら耳なんじゃ…」

「とにかく行ってみましょう。

今回も園子さんと赤嶺が稽古を付けてくれるのかもしれない」

「楠、ちょっと嬉しそう…？」

「そ、そんなはずないでしょう！」//

「ねーえ、氏紙さんも見当たらないんだけど誰か知らなーい？」

「流れ的にイー！楓さんも捕まってイー！るのではなイー！かと思イー！ますわ！」

「えー…どちらかというと氏紙さんは仕掛ける側のような…」

「すまないみんな…一緒に来てくれないか？」

「まっ、園子が何人いようと、この完成型勇者の私が居れば敵じゃないわ」

=====

「ふっふっふ…よく来た勇者諸君…」

「園子！また性懲りもなく、今回はどういうつもりだ！！」

「あれ？園子さんだけじゃないですか？」

「放送の声は別録りの合成だったということかしら？」

「独りじゃあないさ。私がいる」

「その声は！」

「楓さん！」

「クカカ……やつは死んだ。もういない」

「いや…

楓とかいうやつは、あのとき既に死んでいたのサ。少し考えれば分かることだ。脳細胞ひとつ残っていないキカイノカラダに甦るなんてナア…？ お前たちはやつを死なせてしまった罪悪感から逃げるために、この邪神様の小芝居に乗っていただけなのサ。実に都合が良かった。お陰でお前たちを抹殺できるまでの時間が稼げたよ。アリガトウ」

「う、嘘だよね…氏紙さん…？」

「だって、あのとき…氏紙さん言ってたもん…私は、わたしだって…！」

「オイオイ、知らないのか？その氏紙さんとやらは嘘は吐かないんだろう？」

「……氏紙さん……が死んでる…？……………わたしのせいで……」

「雀さん…」

「…アレが彼であろうと…なかりとうと！！仕置きが必要の様ね！！」

「なんだかんだ言って御前も勇者だよなァ、郡千景。実に素直でイイコだ」

「彼の声でイイコなんて言わないでちょうだい！虫唾が走る！」

「しかし口車に乗ってしまって良いのか？」

「こいつは本当は生きていてワタシが操っているだけかもしれんぞ？」

「だとしたら勇者に攻撃などされたら簡単に死んでしまうダロウナァ！？ハハハハハ！！」

「くっ…！」

「今回は悪趣味が過ぎるぞ園子！……そこに直れ！！」

「カカツ！仲間割れか！良いぞ良いぞ、では追加しよう……」

「な！？赤嶺に雪花！」

「弥勒と」「ウチもや勇者ども…」

「そのっち！やりすぎよ！」

「本当に御前の親友の筋書きだと思うノカ？御前の親友はそんな奴だったカ？東郷美森」

「…たしかに、そのっちは悪戯好きだけど、それでも誰かを泣かせるようなことはしない…
…！」

「私も未来の自分がこんなことするなんて思えないよ…」

「じゃあ、本当に邪神が園子さんたちを操っているというの…！？」

「さあ、どうするんだ御前たち？このまま罨り殺しがお望みか？全員を洗脳することもできるワタシとしては、勇者同士で殺し合ってくれた方が愉快的のだがナア？」

…ああそうか、緊迫感が足りないか。では一人、そこから飛び降りてもらおう」

「はい」

「桐生さん…！止めるんだ！」

「おーっと、行かせないよー？」

「退くんだ赤嶺！退いてくれ！！」

「あいつも人質を使ったことがあるそうだが実に生温い…」

人質の命は綱渡りでなくては、つまらんよナア…？そうは思わんか救世主東郷美森」

「何故、私にそんなこと…」

「聞いているぞ？世界と親友の尊厳、どちらかを選べと迫られたそうじゃないか、いったいどんな気分だった？それで世界を滅ぼすことを選択する辺りが実に好感が持てる。神樹の勇者など辞めてワタシの元に来る気は無いカ？ここでの記憶の消滅そのものは防げぬが、御前のために不滅のバックアップを用意してある」

「現実世界に記憶を…持ち帰れる…？」

「そうだ。それに散華によって神樹に記憶を奪われたとしても、バックアップから記憶を戻すことができる。神樹の戦闘人形としてただ消費させられるだけの勇者などより、ずっと良い条件ダロウ？」

「それ……は…」

「駄目だよ東郷さん！」

「そうです！たとえ本当にできるのだとしても、邪神が約束を守るとは限りません！」

「東郷美森以外もそれでいいのカ？根拠のない猜疑心で千載一遇の機会を失うことになる。ひいては、この経験さえあれば生き残れたはずの仲間の命を見殺しにすることと同義だが本当にそれでいいのカ？後悔しないのカ？たしか半数は殺されてしまっていたよナア？」

「悪魔の甘言です！みなさん惑わされないでください！」

「煩いナア…伊予島杏。想像してみるがいい…」

「目の前には乃木若葉でも早々傷を付けられない神の使徒。
それが、ひ弱な自分に狙いを定めて迫ってくる。

当然土居球子が御前を守りに入るが、初期の勇者システムでは耐えられず、あっけなく護りは砕け、弱い御前のせいで土居球子は強大な神の力に圧殺され磨り潰されるのだ。ゆっくりと潰れてゆく土居球子の苦痛と恐怖に歪んだ表情は最高だったぞ…！

土居球子が御前に助けを求めて手を伸ばしたか細い腕が食い千切られ、小さな身を凌辱される際の絶望しか乗っていない悲痛な叫びは！泣き声は！！今思い出だけでも絶頂してしまいそうなほどで、涎と全身の震えが止マラナイッ！！……そんな光景を御前はただ啞然と眺めていることしかできず、くだらない星屑に背後から咀嚼されて終わるのだ」

「そんな……そんなの…、そんなの…いやっ！」

「嫌だと言ってももう遅い。これはすでに終わった過去のことだ。そしてこれから、その記憶が延々再生されるように御前の脳に擦りつける。何周まで持つのか愉しみだナア?!」

「嫌っ…！！いや…来ないでっ…！！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！！」

「杏に近寄るな！！」

「安心しろ杏！タマは死なないし、杏も死なせない！タマが守るからな！！」

「タマっちせ「そう自らの命を粗末にするものではないぞ土居球子。自分でも頑張れば誰かを守れると希望を抱いた瞬間に、守りたかった者を殺され、自らも死ぬその場面の再現を、ここでもしても良いのだぞ？ワタシは御前が耐えられなかったことを知っている」

「ええーい！うるさい！

「タマにそんな難しい話されても分からんぞ！」

「…残念だ。大人と成り、美しく気高く格好良く、しかし温かく成長した御前の姿をワタシは見たかったのだがな……」

「にゃにゃんだおまえ！今更、褒めったって許さないんだからな！」

「足元に気を付けた方が良いぞ」

「な！！？ぐあっに！？」

「球子！！おのれ騙し討ちとは卑怯な！」

「何を言っている。普段から足元に気を付けるべきなのは当然だろう？」

「だから土居球子は言葉に操られて俯き、投げ槍の急襲に対応できず足を掬われたのだ」

「おっと危ない。奇襲は勇者のすることかな郡千景？」

「もう減らず口は沢山よ！」

「御前の過去がもっとも悲惨だった…いや言うまい、御前はとても頑張り屋だ。そしてお前が頑張れば頑張るほど求めたものが遠ざかる様など語るまい…憐れだ」

「知ったような口を！」

「知ったようなではなく知っているのだよ。御前がどういう家で育ち、どういう「黙りなさい！！」

「くっ…頭脳派はアイツの言葉で心を折られて、脳筋は騙し討ちにやられる…！」

「夏凜！あいつは一对一でしか対応できないはず！とにかく今は桐生さんの救助が最優先！」

「そうか！芽吹、私に合わせて！」

「止めや…一歩でも動いたら飛び降りんで？」

「時間稼ぎなど面倒だ、桐生静。未だ事態の深刻さを呑み込めていない愚か者どものために、今すぐ飛んでやれ。冗談だとでも思っているのだろう」

「……………邪神様のっ…仰せのままに…！」

「やめ！！静あああああ——！！！」

「っ……！」

「どうした赤嶺友奈。分かっているも友人が死ぬ様を見るのはやはり心苦しいか？」

「……何でも、ありません。邪神様…」

「そんな…！桐生さんは巫女だから精霊の加護も無いのに…ひどい…！」

「ワタシは言ったじゃないか藤森水都。仲間を見殺しにしても後悔しないのか？」

「うそ……地面に…血溜りが…… ううっ！？…おええ！」

「カカカ！！人が肉に変わるのを見るのは初めてだったか！！おいおい…一人死んだくらいでなんだ御前たちそのザマは…勇者システムも解けてしまうとは。責任を取って次は御前が跳んでみるカっ……………！？」

「……………さすがにこれ以上は見過ごせないよ楓くん……冗談じゃ済まないよ…」

「私も伊予島さんが錯乱した辺りで

『あ、これ、やばいかなー』と思い始めてたんですけど、やっぱ不味かったですよね…」

「そうだね…『辞めるタイミングは神ゆーゆで』って

最初に決めたことだけど、そんなの無視して止めに入るべきだったよ…」

「楓さん…全員泣かすつもりでしたよね…？」

「本当は私たちのこと、あんな風に見てたんですか…？」

「人が喜ぶ言葉が分かるということは、その逆も、ということね…

「追真の演技に、この弥勒できえ口を挟めなかった」

「私が造反神側についてたときも、ここまでしなかったよ…」

「ほんまほんま、分かっっても屋上から飛び降りるんは、ごつつキツかったわー」

「…どういふことが説明してもらおうかしら」

「ちゃんと罰を受けることができた生身が恋しいなあ…」

「楓さん答えてください」

「乃木さん。立案したのも計画したのも私が行ったことで、すべて悪いのは私です。なので罰も誹りも、すべて私に、お願いします…」

「それは話を伺ってから決めます。土下座も止めてください」

=====

「乃木園子様、秋原雪花様、赤嶺友奈様、桐生静様」

「此度の招集。特に議題を知らせていないにも関わらず、黙して応じていただき感謝致します…」

「嫌な予感しかしないけど、招集メンバー見たら、むしろ先回りしなきゃ逃げられない気がして…」

「またなんか、おもしろいことするつもりなんやろ？今回こそ一枚噛ませてもらうわ」

「今回も良い風、期待してまーす！」

「楓さんをからかいに来ました♪」

「フッ」

「ドギマギして私の身が持たないので赤嶺さんは自重してください」

「でもほんとは？」

「ちょっとだけ嬉しい…っじゃなあい！違う！やめて！」

「メモメモ～♪」

「楓さんももう女の子なんだから、そんな気にしなくていいのにねー。今日も楓さんひんやりしてる～♪」

「そういや、男性体の義体は造らんの？」

「ああ、それはですね」

「あ、いや言わんでええで。見とったらなんとなーく、察し付くわ」

「ほう？」

「男に戻ったら、今みたいなボディタッチが減ってまうもんなー？この助平っ」

「うわ…やっぱり楓さんって…」

「やめて…そういうのは冗談でも心にくるからやめて…違うから…義体に触覚とかほぼ無いから……全身鎧のアルフォンス君だから…悲しみの息の根を止めてほしいから…」

「フッ、楓はこの弥勒と友奈に迫られても折れなかった超合金の心を持っている。

ボディタッチくらいで流されるような女ではないわ」

「ありがとう御座います弥勒さん……私の幻覚じゃなくて本当に居たんですね…

…呼んでないのに」

「友奈と静を呼んで、弥勒を呼び出さないとどういうことか。説明しなさい楓、今すぐに」

「あれ…？弥勒さん、もしかして呼ばなかったこと怒ってらっしゃいますか…？」

「それ、私も気になってたんだー。どういう招集基準なの楓さん？」

「けふん。今回、お集まり頂いたのはですね。
私の中のもう一人を、皆にどう説明しようかという相談でして
悪巧みが好きそうで、シリアスも熟せ(こなせ)ちゃう女優さんな皆さんを御呼びしました」

「ほっほーう…ハリウッドばりの大女優のウチを呼ぶとは、エエ目しとるで、うっちー」
「楓さん…。悪巧みはともかく、シズ先輩にシリアスはできないよ…」
「フッ『友奈にできるなら弥勒はもっとできる』次からは弥勒も呼びなさい、楓」
「いや…レンちもシリアスは…」

「うん？流しちゃってるけど『私の中のもう一人』ってどういうことかじゃん？」

「ピッカーン！
愛する人を守るため！讃州市の平和を守るため！
地獄の底から甦った楓さんの左手には、強力なお供の鬼と新たな力が！！」
「いやいや、そんな少年漫画みたいな」

「んー、半分正解かなー？さすがだね、園子ちゃん♪」
「えへへー、それほどでもー」

「？…今の声、楓さん？」
「半分はそうですね」
「赤嶺も居るのに、特に意味も無く紛らわしいことしないでくださいよー」
「意味はあるんだなーこれが」
「？？？どういうことです？」

「それは「楓くんの中にいるのが私だからだよ雪花ちゃん♪」
「????」
「えーと、かいつまんで言うと、私の中に高嶋友奈が居ます」
「そんな冗談に乗せられる雪花さんじゃありませんよ？」
「マジです」
「？でも高嶋先輩ならさっきあったよ？」
「んー、ここに召喚されている高嶋さんではないんですよ」

「地獄から連れて来た友奈？」

「初めからここに居た友奈です」

「弥勒には分かったわ。つまり、友奈と友奈と友奈とは別に友奈が居ることね」

「さすが弥勒さん。申告通りに受け取っていただいて、ありがとうございます」

「フッ、気にしなくていいわ」

「ロックそれ、結局よく分からんやつやないか」

「ええまあ、証明が難しいのもあって、その相談でもあるんですよ」

「難しいというかほぼ不可能ですよ楓さん…義体の楓さんは声も自由に変えられるわけ
すし」

「そうなんですよー…」

「一回、整理してみようよ。

　　どういうわけか楓さんの中には新たなゆーゆが宿っていて

　　そのゆーゆは、この世界に召喚された結城友奈でも高嶋友奈でも赤嶺友奈でもない。

　　仮にそのゆーゆを『神樹様の中の世界に居たゆーゆ』神ゆーゆとして

　　今の今まで誰にも存在を悟らせなかった神ゆーゆは

　　いったい、いつからこの神樹様の中の世界に居たのかな？」

「300年くらい前からかな？」

「さっ300年?!」

「たかしーが居た、西暦の時代と重なるね…」

「もしかして、神ゆーゆは現実世界の私たちのことも、それぞれ知ってるんじゃないかな？」

「うん♪良く知ってるよ♪」

「そっか…神ゆーゆは、たかしーで神ゆーゆなんだね…」

「うん?それって」

「ううん…つまり

神ゆーゆは皆が隠してる、あーんなことや、そーんなこと全部知ってるってことなんよ！」

「なっ！？マジですか楓さん！」

「ホンマなんやとしたら、誰にも話してない鎬矢としてのウチらも知っとるちゅーことか」

「えっ……じゃあ楓さんも知ってるの…？」

「どうなんすか神奈さん」

「雪花ちゃんと棗ちゃんは神樹様との縁が薄かったから、そこまで知らないかなあ？

ここに來てのことならともかく」

「ああ！？それって楓さんがみんなの弱みを握ってるってこと！？」

「ふっふっふ、そうだよアッキー…

つまり乙女たちのきゅん♪きゅん♪なメモリアルがすべて楓さんの手の中にー！！」

「ひっ！？」

「だ、大丈夫だよ雪花ちゃん！赤嶺ちゃん！

私は皆のこと知ってるけど、楓くんにそういうことは話してないから！！」

「ほーん？記憶は共有されてないんか。

アカナとロックの恥ずかしい思い出とか、聞こう思たのに」

「言わないよ！？」

「ふむふむ、恥ずかしい思い出自体はあると…」

「ちょっ！シズ先輩！？」

「フッ、弥勒に恥じるどころなど何処にも在りはしないわ。だから大丈夫よ友奈」

「レンちには無くても私にはあるの！！」

「アカナは割とお澄ましちゃんやけど、天然やもんなー」

「シズ先輩？！！」

「それより、楓さんは『神奈』呼び、

神ゆーゆは『楓くん』呼びとは、何かただならぬ関係を感じますなあ？」

「ふぁ？！こっちに矛先が！？」

「楓くんがここに来てから、朝も夜もずーっと口説かれてるんだー♪」

「神奈さん！？」

「私たちってどういう関係なのかなあ？楓くん」

「おお？！おおおおおおお！！！！！！！！？どういふご関係なんですか楓先輩！？」

「いや…そんな深い関係では」「でも特別な関係？」

「だからどうして友奈族はみんな思わせぶりなこと言うんですか！！誤解されるでしょう！！！」

「えーそれ楓さんが言っちゃうの？」

「だよねー？…ここに来てからずっとってことは、あの夜のあともなんだー、へー……………」

「弥勒と友奈を差し置いて友奈とは……楓？」

「あっはっは！修羅場やで、うっちー！」

「どうしてこうなった！」

「いや自業自得でしょ」

「そっかー、楓さんが誰にも手を出さないのは、出さないんじゃなくて出せなかったんだね」

「違うと言ってるでしょう！？解ってて言ってますよね乃木さん！？」

「テへ、ペーロりんっ☆」

「おのれ一回転ジャンプ着地で横ピース付きとかもう可愛いなあ！！腰の置き場若干の下げ眉に薄っすら頬を染めてからのウィンクに合わせて小首をかしげる角度タイミングまで完璧だよ素晴らしいよ練習してやがったなちくしょう **好き！！！！！！**」

「うわ、あざとい……もうこの際一人に決めちゃえばいいのに」「それはできませんわ」

「即答ですか…」

「ははっ、わあははははっ！ウチを笑い殺すきかい、うっちー！」

「これが私の役割ですからね」

「んー？前も言ってたけど、役割って」

「ああ別に、誰かに命令されてやってる訳じゃありませんよ。

私がここで決めた、ここでの役割です」

「ハーレム王？」

「私を殺す気ですか」

「楓くんはこういうとこ融通が利かないんだよねー

楓くんが『絶対』って言ったら絶対の絶対なんだもん」

「そうね。それで何の話だったかしら？」

「なんやっけ？うっちーの女装趣味について？」

「ちがわい！！『証明の難しい神奈さんを、どのようにしてみんなに説明するか』です！」

「あー、そんな話もしとったなあ？けどそれ、もう解決しとらんかー？」
「楓も皆も知らないことを、それぞれに話せば良いのだから解決済みね」
「ボケながら真面目に答えられるとか、どっちに反応すべきかメッチャ疲れる…」
「すまんて。うっちーの反応が、オモロすぎてなあ」

「堪忍してちょんまげ」
「ふうっほほ！！やめえ…やめえ…！！！」

「実はこの身体なー。ここんところにとっ手あんねんけど、ちょっと取ってみてくれへんか？」

「ぶっふぉ！そんなっ、取って、付けたような！洒落を言うんは止めなしゃっぼっは！！
あーっはっは！！しぬう！！しぬううう！！！」

「楓さんのダジャレに、自らダジャレを重ねて自爆してる…」
「勝ったな……これが真の親父ギャグの力だ………取って置きのな…」
「寒いなあ……もう蝉が煩いのに…」

「静が静かになったところで、このあとはどうするの楓？」「レンち！？」

「……………っ！……………っ！！」ダンダン!!
「フッ」
「どうして対抗してしまうのか…」
「まあ、シリアスが終わったので、次は悪巧みの Turn ですね」
「シリアスなんてあったかなあ…ずっとギャグパートだった気がする…」

=====

「……………。それが、どうしてあんな悪趣味な芝居に繋がるんですか」

「実は私がこの前死んだときに、走馬灯とは違うと思うんですが、皆さんの様々な死の情景を見ていたのを思い出し、神奈さんに相談したところそれが一部史実をなぞっていて……伝えなければと走り出していました……」

「私も最初はあそこまで…あんな風に言うつもりは無かったです…
けれど邪神になりきっていたら、いつのまにか抑えが利かなくなって…」

「狂人の真似をして、狂人に成りかけたということね…馬鹿なことを…」
「始める前に園子たちは止められなかったのか？」

「それは不可能だったと思います。『大事なことを伝えなければならないから、何があっても神奈さん以外は止めないでくれ。全員の身の安全も保障する。絶対に』と私が先手を打って誓わせていました」

「その楓さんの中に居るといふ友奈は何故止めなかったんだ？友奈らしくないだろう…」

「私も元々神樹様や造反神様たちと一緒に、ここではみんなに辛い思いをさせていた立場だったから……私なんかが生者の意思を遮ってしまってもいいのかなって…
それに楓さんに神罰と共に与えられた世界の記憶は、中立神様のご意志のはずだから…ごめんなさい…」

「…？楓さんも神奈さんも私たちが知らないことをご存知なのでしたら、神奈さんがいる証明もできなくなるのでは…」

「はい。なので勇者同士の戦闘行為を切っ掛けに、今は取り除かれているもの…神樹が勇者システムに介入し『勇者から勇者の力を一時的に取り上げる』もしくは『精霊バリアの強制発動を行う』という、私が絶対に行えない力の行使を見せることで信じていただくつもりでした…」

「それも、楓さんが神樹様から権限を与えられていないという悪魔の証明が必要になるのではありませんか…？」

「はい…どうしたって最後は他人の内心を信じられるかどうかとなってしまいます…」

「今回の件で大きく信用を欠いてしまった私の失敗です…神奈さん、すみません…」

「ううん…楓くんが居なきゃ、皆とお話しすることもできなかったもん…

いっぱい考えてくれて、ありがとう…楓くん…」

「みんな！聞いて！」

「高嶋さん？」

「あのね…これから私がみんなに、神樹様が現れる前の。私しか知らない私のことを話そうと思う………だからね？私が話したことと同じことを話してくれたら、もう一人の私のことも信じてあげてほしいの…」

「確かに友奈さんなら、もう一人の友奈さんの内心の存在を証明できます…。ですが直しいんですか？話していなかったということは、それだけ話し辛かったということでしょう…？」

「うん…いつか言うつもりではあったから……それに 300 年もぐんちゃんと離れ離れで、みんなとお喋りすることもできないなんて…もう一人の私はきっと耐えられないくらい辛くて寂しかったはずなの…だから私は信じたい」

「分かった。友奈の件は友奈に任せよう。問題は楓さんが負わせた心的外傷の件だ…」

「球子さんは軽く頭を打った程度ですが、雀さんと杏さんは完全に怯え切ってしまっています。夏凜さんも仕掛けが分かって持ち直してきてはいますが、暫くは戦闘に支障が出るでしょう…風さんは連れて来た自分のせいだと責任を感じて苦しんでいます…」

「謝っても謝り切れません…」

「あの…楓さんの演技は何処までが嘘だったのでしょうか？」

「あのときも言いましたが『私は嘘を吐きません』。嘘にならないように選んではいますが、あのときの言葉もすべて私にとっては事実であり、邪神も私の一面なのです」

「ということは記憶を持ち帰れるかもしれないということも!？」

「東郷それは…」

「はい。私にとっては事実です。現に私は私を記憶を含めて、この機械の身体に写し取ることができていますし、これは今後次第ですが、人の身で記憶できなくとも神であれば記憶していただけるのです。でなければ造反神の試練も、中立神へのプロモーションも意味はありません」

「まって楓さん、私それ聞いてない。現実世界には義体は無いし、後半は神樹様にお願いするつもりなの…？神に意見するなんてことしたら…」

「いいえ。神樹にも造反神にも中立神にもそんなことは頼みません。もちろん天神にも」

「どういうこと…？」

「詳細は伏せさせていただきますが、私はある者とそういう契約をしているのです」

「その人は信じられるの…？危険は無いの…？」

「信じられるし危険もありません。

…ただ何処まで上手く行くかは、やってみないと分かりません」

「ねえ、楓さんが嘘を吐いていないってことは、杏や夏凜に言ったことも本気だったんだよね？夏凜に『屋上から飛び降りろ』って言ったのも本気だったんだよね？そんな人の言葉…
…私は信じられない…」

「はい。あれもすべて私の本心から出た、私の本性のひとつです」

「最低だね…」

「はい。私は最低です…」

「先程『全員の身の安全を保障すると誓った』と言っていたが、あれは嘘ではないのか？飛び降りた桐生さんは宣言通り無事だったが、怒った私たちの誰かに楓さん自身が殺されていたかもしれない」

「大丈夫です。あの身体は遠隔操作していた試作機で、本体の私は、桐生さんを確保するためにすぐ下の階の教室にいました。なので、あの場に居た誰にも私を殺してしまうことはできませんでした」

「そうか…良かった…」

本当に演技が暴走するまでは、いつもの楓さんだったんだな。ならば私は信じよう」

「私ね、楓さんが骨折して入院してたときにチーちゃんと、あんずんと、話したことがあるの…『楓さんが送られてきたのは私たちへの新しい試練なんじゃないか』って」

「実際、思うんだ…。楓さんにできたことは当然中立神にだってできるし、今回楓さんがやらなくとも別の形でやられてたんじゃないかって…私たちはきっと、これを乗り越えなきゃいけないんだろうなって…」

「赤嶺みたいにお役目のために仕方なく自分を騙して演じてたわけでもなく、本心で夏凜たちを傷付けた楓さんを許して信じろってこと！？そんなの私には絶対無理！」

「私は秋原さんが正しいと思います。

前から皆さん、私なんかを無警戒に信用しすぎなんですよ…」

「郡さん、以前のように私を悪人ではないと言い切れますか…？」

「それは…」

「迷いますよね…。それほど皆さんは、私のことを知らなかったんです」

「楓さん。チーちゃんや、みんなが迷っているのはね？たしかに楓さんのことを知らなかったからかもしれない。でもその迷いは信じたってことでもあるんだよ…？」

「この際なので一切を曝しますが。

私は誰も信用しないし、誰にも私を信用して頂きたくありません」

「…っ。私たちは信用できない？どうして信じてほしくないのかな？」

「いいえ。何度だって言いますが、貴女たちはみんな素晴らしい人格者で、善人で、呆れるほど突き抜けたお人好しで、美しく、気高く、儂く、尊い、私が私の全存在を捧げて守りたいと思える愛しく愛しい人たちです。貴女たちを信用できないものなど、高天原にも地獄にも居ないでしょう。精々天邪鬼くらいです。故に私に対する信用は邪魔なんですよ」

「相当の天邪鬼のようね…」

「ちょっと好意を示されたくらいで柔和しないでください郡さん」

「そう仰られても、そのように好意を示されてしまうと、憎むに憎み切れなくなってしまいますよね…」

「楓さんは私たちを裏切ってしまうのが怖いんだね」

「そう捉えていただいて構いません。

好意で好意の対象者の尊厳も人権も踏み躪り、搾取し、惨殺する人間たちを私は良く知っています。そして私はそんな人間たちの同類です。これは以前郡さんにお話しした通り、自身ではどうにもならないことで、これまでそうして来たように、私は必ず貴女たちを裏切り、致命的に心を切り刻むことになります」

「なのでどうか、お願いですから、私を信用しないでください。

初めから私を信用していなければ、裏切られることもないんですから…」

「まるで、本当は村人と仲良く遊んだりしたい怪物さんが、自分は恐ろしくて力も強いからって、わざと嫌われようと村人を脅かして遠ざけてるみたいだね。強い力を持っているのは、楓さんじゃなくて私たち勇者のはずなのに……」

「私は全身を刃物で覆った、弱くて小さい臆病な獣であり、弱いからこそ手加減を知らず、弱くて臆病だから殺すと決めたら躊躇しない。そしてつもりが無くとも、じゃれ付けば相手を切り刻む危険な獣です。なので近寄らないでください」

「…近寄るなど言いながら甘言を投げ続けるのはどうしてかしら？

みんな貴方の言葉に誘われて歩み寄ろうとしているのよ」

「…私は嘘を吐かないので」

「それこそ嘘ね。貴方なら嘘を吐かずとも隠し通せるでしょう？」

「…さっき『一切を曝す』と言ったじゃない…。子供みたいに照れて隠さなくたって良いわ」

「それでも…それでも、曲げるわけにはいかないんですよ…」

「私たちを貴方から守るために？」

「そうです…」

「ふふっ、こんな可愛らしい傲慢な台詞は初めて聞いたわ。

随分見くびられたものね、乃木さん？」

「ああ…そうだな、千景。

私たちは楓さんからしてみれば、ほんの小さな子供かもしれません。

それでも私たちは、幾つもの死線を潜ってきた勇者です。

年長者の方に、こう言うのは失礼に当たるかもしれませんが……辛くて助けが必要なきはいつだって肩を貸します。苦しくて泣きたいときには胸も貸します。

なので、一人で抱え込まないでください。

楓さんも私たちの大事な勇者部の仲間なんですから」

「若葉さん…」

「まさか、私が口説かれる側にまわるとは思いませんでしたね…」

「ええっ?!」

「上里さんの前で随分と大胆ね、乃木さん」

「もうっ! 若葉ちゃんったら、もうっ!」

「私も若ちゃんにズキューンって来たよー!」

「まあ肩も胸も結構なので、今は知恵を貸していただけると有難いですね」

「知恵は脳筋の乃木さんには荷が重いでしょうから私が貸すわ」

「ひどいぞ千景…」

「ああっ! 拗ねているようで拗ねていない照れ困り若葉ちゃんも素敵です!!」

「なんとか、話は丸う収まったような、うっちー」

「フッ、弥勒が居ながら未然に防げなかったその泥…。弥勒自ら泥へと潜り、掻き分け、引きずり出してあげるわ」

「私たちも力を貸すよ、楓さん。頭はあんまり良い方じゃないけど」

「…（東郷さんと秋原さんは宜しくね、結城ちゃん…）」

「雪っちゃん…」

「雪花…」

「あらら、結城っちに東郷…。みんなのところに居ればいいのに、着いて来ちゃったのん？」

「ごめんけど、私は楓さんを信じることなんてできない」

「私も地元では色んな人に会ってきたからさ、なんとなく分かるんだ。

楓さんがみんなを心配してるのは本当で、大事に想ってるのも本当で、私たちのために記憶を持ち帰る方法を一人で探してたのも本当で、杏やタマちゃんが苦しむ姿を思い出すと興奮するってのも本当なんだって。

私、楓さんが怖くって、理解できなくて、逃げちゃったんだ…

倒し切れなさそうな数のバーテックスとだって独りで戦ってきたのに、勇者失格だね…」

「美森は理解できる？」

例えば、結城っちが知らない男の人達に鉄パイプで滅多打ちにされててき…

結城っちは『止めて』『痛い』『助けて』って泣き叫んでるの。そんな結城っちを蹴ってる人たちは笑って殴り続けて、結城っちが声を上げなくなったら服を脱がせて乱暴するんだ……そんなのを見て、嬉しいって、興奮するって、そんなこと言う人が理解できる？信じられる？

おかしいよ、あの人…」

「そうね…私も理解はできないわ…」

「東郷さん…」

「でも、あの邪神の言葉が楓さんの本心なら…たとえ私たちの心を折るために吐いただけの悪魔の甘言だったとしても、私たちを慮った言葉もまた真実なのよ雪花…

だから私は理解はできないけど、歓迎会の日に言っていたように、私が友奈ちゃんを想うくらい楓さんもみんなのことを想っているのなら…楓さんが私たちに酷いことをすることも絶対に無いと信じたいの…」

「そんなの、調子の良いこと言っただけの出まかせかもしれないじゃん…」

「それならあの邪神の言葉も、ただの演出だったのかもしれないわ」

「だから楓さんが言ったように、いくらでも取り繕える上辺の言葉なんて関係無くって、

私たちが相手の心根を信じられるかどうかなの…」

「ごめんね…やっぱり私には無理みたい…

結城っちも、そんな強く私の手を握ってなくたっていいよ。

雪花さんは皆が大好きだからね、お家に帰るだけで何処にもいかないよ。

突然、居なくなったりしないから…そんな心配そうに見つめないでよ…

泣きたくなっちゃうじゃん…か……結城っち…東郷っ……

怖いよ……！ずっと一緒に居てよ…！

雪花さんのっ…知らない間に消えたりしないでよ…！」

「うん………ずっと、みんな一緒だよ。せっちゃん…

ほんとはね、私も、ちょっと怖いんだ…楓さんみたいな人初めてだから…

だからギュって、せっちゃんの手を離せないの。

でもきっと

それは皆も、楓さんもきっとそうだから、私は勇者だから、みんなを信じるの」

「私はっ…そんなふうには、成れないよ…！」

「雪花…っ！わたしだって…！わたしだって本当は怖い！信じるのも…！失うのも…！みんな怖いの…っ！！」

「東郷っ…！東郷……っ」

「雪花ああ` ああ` ……っ！」

=====

「……なんか、恥ずかしいとこ見せちゃったね…」
「私も…その……あんな風に泣いたのは、友奈ちゃん以外には雪花だけよ…」
「や、やめてよ、なんか恥ずかしいじゃん…」
「私だって恥ずかしいけど…やっぱり言葉にするのは大事だと思うの」
「じゃあ…私も言うよ、言っちゃおうよ…っ」
「言って、雪花。私も言うから」
「せーの、で言うからね？『せーの』の『の』で一緒にだからね？」
「ずらして、私だけ言うとか無しだからね？」
「分かってるっ。せーのね？」
「いくよ？」

「「せーのっ「東郷さーん！！雪っちゃん！！」

「高嶋ちゃんが…！……あれ？どうしたの二人とも？」
「「な。なんでもご迷惑ありません」」////

「んん…？」
「あーやしーですなあー…」
「ゆ、友奈ちゃん…？」「結城っち…？」

「…そおれ！こーちょこちょこちょ！！」
「きゃっ！…はははははっ！ゆう、なちゃん！、だめっ、そんな！とこっ！あははっ！！」

「よーし……私も参戦だ！東郷っ覚悟！！」
「ちょっ！せっかま、でっ！だめ！だめったら！あふふふっ！苦しいっ！わっ、もうっ！」

「「ふっふっふ」」

「…コホン。いくら雪っちゃんとな、ウチの美森はやらんからな！」
「おやおや、お父様。娘を独り占めとはいただけませんなあ。
そのようなことを申しては、美森さんが婚期を逃してしまいますぞ？」

「やかましい！美森は、友奈パパと結婚するんだー！」
「まあっ、お父様ったら♪」

「美森さん！こんないつまでも娘離れできない父親などほうって、私と暮らしましょう！」
「ごめんなさい、秋原さん。わたくし箱入り娘なの…お父様を置いてなんていけないわ」

「美森——っ！！」「お父様——っ！！」

「ありゃりゃ、振られちゃったや」
「ごめんね、雪っちゃん」
「うん。しょうがないにゃあ」

「そうだ！今日は雪っちゃん家で、お泊りしようよ、東郷さん！」

「あら素敵ね、友奈ちゃん！」
「アハハ。もう、あんなどこ見せちゃったから断れないよ。
夏凜も心配だから呼ぶね、結城っち」
「そうだね、雪っちゃん！」
「風先輩と杏さんも心配だわ…」
「あ、そうだ言い忘れてた。高嶋ちゃんたちが

「雀…」

「メブ…弥勒さん…」

「大丈夫ですか雀先輩…？」

「あややとしずくも……私、どうすればいいんだろう…」

「雀さんは、どうしたいんですの？」

「私は氏紙さんを信じたい…また前みたいに、ふざけたり遊んだりしたい…

だけでもう、どう付き合っていけばいいのか分からないよ…

あのときの氏紙さん…人の命を何とも思っていないみたいで、すごく怖かった…」

「それは演技だったからでしょう？」

「ううん…みんなは知らないかもだけど、氏紙さんは冗談を言うときも本気だし、嘘は『嘘だ』って言うの。だから私やみんなが気にしてることをあんな風に……心の中を覗かれてるようなあの感覚が怖い…私のことを本当はどう見てるのか知るのが怖い…！」

「私も…ちょっと怖かった………隠しても無駄だって、いつでも握り潰せるぞって、心臓を撫でられてるみたいだった…あのまま止まらなかったら、きっと私も杏みたいに……！」

「あー、今になってビビっちゃったか、しずく。

自分で想像して、自分の想像に怖がってちゃ世話ねーぜ」

「シズク先輩は怖くないんですか？」

「ハッ！俺は相手が誰だろうが関係ねえ。しずくを虐めんなら、またぶっ飛ばすだけだ」

「シズクは、それでいいかもしんないけどさー…」

「おめえも一々気にしてんじゃねーよ。

他人が腹ん中で何考えてっかなんて、初めっから分かりゃしねーだろうが」

「それはそうだけどー…」

「なるほど…想定外への対処方針が定まっていけないのね」

「まあ、意中の方が自分の思ったような方ではなく、期待から外れてしまってショックを受けていらっしゃるのですから、そういうことですわね」

「いい意中って弥勒さん！そんなんじゃないよ!？」

「隠せてると思ってたのかよ…オレでも分かるぜ…？」

「えーっ…えーっ…」 //

「亜耶ちゃんは平気？」

「私も少し怖いですが芽吹先輩…」

「教えて亜弥ちゃん。何が怖いのか？」

「邪神様は…邪神様なのに、私たちを助けようとしていて、でも神樹様や皆さんに酷いこと仰いますし、でも神樹様をお助け下さるかもしれませんし、でも邪神様ですし…でも神樹様が……どうすればいいんでしょう…？」

「亜耶ちゃん…」

「混乱されてますわね…」

「亜耶ちゃん、あれは本当の邪神ではなくて楓さんなの」

「楓先輩は神様だったんですか！？」

ど、どうしましょう芽吹先輩！わたし、そうとは知らず数々のご無礼を…！」

「えっと…亜弥ちゃん？あれは神様でも邪神様でもないの…」

「？邪神様は神様ではないんですか？」

「そう。あれはただの楓さんなの」

「勇者様を操ったり、心を読んだり、

邪神様みたいなことができる楓先輩は何者なんでしょうか？」

「あれは本当に操られていたわけではなくて、お芝居だったのよ亜耶ちゃん」

「でも、お芝居で人の心を読んだり、操ったりできるのでしょうか？やっぱり楓先輩は…」

「楓先輩は何者なんでしょうか？」

「えー…っと…（どう答えれば良いんでしょうか弥勒さん…）」

「哲学的な問いですわね…（これ以上は、国土さんがドツボに嵌りかねませんわ芽吹さん）」

「…もしかしたら邪神様なのかもしれませんわ」

「でも大丈夫よ亜耶ちゃん。

邪神様でも楓さんだから、亜耶ちゃんに怒ったり酷いことはしないわ」

「そうなんですわ！安心しました！ありがとうございます、芽吹先輩。弥勒先輩」 ♪

「でも邪神様だから楓さんの言葉を信じすぎちゃだめよ、亜耶ちゃん」

「はい♪分かりました、芽吹先輩♪」

「一先ず、ですわね…」

「あれ…私の悩みは…？私、ウヤムヤにされてる…？」

「恋のお悩み相談など、わたくし達の手には負えませんわ」

「だから、そーいうんじゃないんだってばー！私の悩みも聞いてよメブー！」

「ちょっと、雀さん！今のは、わたくしに相談する流れではなくって！？」

「えー、弥勒さーん？」

「な！に！か！！ご不満でも！」

「弥勒さんは、しょうがないなー。しょうがない弥勒さんに私の悩み。教えてあげるよー」

「人が心配して差し上げているのに、貴女は本当に！本当に、小憎たらしい小雀ですわね！」

「もー怒らないでよ、弥勒さーん。ごめんてばー」♪

「まったく！とっとと、お話しあそばせ！！」

「へへへ……」

……………なんだっけ？忘れちゃった」

「あゝ——！もうけっこう！！雀さんなんて！雀さんなんて知りませんわ！！！！」

「ほ、ほんとに、さっきまであったんだって！拗ねないでよ、弥勒さーん！！ねーえ！！」

「弥勒さんってばー！……」

=====

「いでててて」

「球子さん大丈夫ですか？」

「ぜんっぜん！大丈夫だけどさー！

カエデのやつー！演技なら、もうちょっと加減しろってんだよなー！」

「槍を投げたのは秋原さんだけどね…」

「いや、雪花はカエデに言われてやっただけなんだろ！？

なら、やっぱりカエデのせいだ！タマポイント全没収だ！！」

「だいたい、タマはタマのことよりも、あんずがやられたことの方が怒ってるんだ！」

「杏さん…ショックで部屋に籠ったっきり出て来ないね…

うたのんが『元気付けに行く』って行っちゃったけど大丈夫かなあ…」

「そういえば、水都は平気なのかー？」

「…私は、うたのんが居るから。うたのんが居る場所が私の居場所だから、運命がどんなに辛くても、うたのんと一緒なら私はそれでいい。私ほうたのんと一緒に死ねるならそれでいい。うたのんさえ居てくれるなら他は何もいない。それが私の幸せだから」

「……なんて、うたのんが死んじゃったら私もバーテックスにやられちゃうしね。

私は巫女で戦う力はないから。杏さんみたいに勇者として運命に抗う力が無いから、怖いこと言われてもこれまでと変わらないんだ」

「歌野が強いからじゃないのか？」

「ううん。

いくらうたのんが強くっても、やられちゃうときはやられちゃうし、負けるときは負けちゃう。どんなに頑張っても天気は思い通りにはならないし、気を付けても寝てる間に虫や獣に畑を荒らされることもあるし、知らないうちに病気が拡がってて、大切に育ててきたお野菜を全部棄てなきゃいけないこともある。

農業もバーテックスとの戦いも同じだって、うたのんも言った」

「ふふっ、農業と同じなんて変だよな。

でも、そうなんだよ。人の身でどうにもならないことがあるのは当たり前。だから球子さんが、うたのんよりも若葉さんよりも強かったとしても、杏さんは同じ結果になってたと思う」

「じゃあ……。じゃあ、タマが、あんずにしてやれることはなにも無いのか…？」

「ううん、そんなことはないよ。

たしかに、杏さんが自分で気持ちに整理を付けなきゃ仕方がないことだと思う。
でもね、不安なときに大好きな人が傍にいてくれるだけで力になるんだよ。

言葉なんていらない。

泣きたいときに黙って抱きしめてくれて、手を握って隣に立ってくれる。

困難と一緒に立ち向かってくれる。

嬉しいときに一緒に笑ってくれる。

背中を押して支えてくれる。

そう信じることができる。

そんな関係でいてくれるだけで良いんだよ」

「む、むーう、結局タマはどうすればいいんだー？水都ー？」

「ううん！つまり球子さんは、いつも通り！お布団に籠ってる杏さんの手を握って、ただ起きるのを待っててあげればいいんだよ！」

「なんだ、それでいいなら早く言えよな水都ー！でもサンキューな！」

「よっし、水都！さっそくあんずの部屋に突撃だ！！」

「わ、私も行くの！？」

「当たり前前だろー！！歌野がそこに居るんだから、水都もそこに居ないとな！」

「……………うん！」

=====

「ハロー！杏さん具合はどうかしら！」

「歌野さん…」

「あら、まだ芳しくないようね。隣良いかしら？」

「…どうして来たんですか？」

「どうしてって、フレンドのお見舞いに来るのにスペシャルな理由が必要かしら？」

「…いえ」

「それにしても、すごい本の数ねー。床が抜けないか心配になるわ」

「歌野さん…」

「なあに？杏さん」

「私…もう戦えません」

「そう、それは残念だわ」

「…何も言わないんですか…？」

「何って、残念だって言ったわよ？」

「…叱咤したり励ましたりしないんですか？」

「杏さんはもう頑張ってるじゃない。

それに駄目なときは駄目だもの、無理は体に良くないわ」

「諦めるんですか…？」

「畑だって休ませる時期を挟まないと土が痩せちゃうし、ずっと同じ作物を育てていたら虫や病気の巣窟になってしまう。だから杏さんが、またお日様に向かって葉を伸ばせるようになるまで私たちは待ってるわ」

「私は、もう駄目なんです…！待っててもらっても立てないんですよ！！」

「それは杏さんの戦いだもの、そのときはそのときよ」

「どうして放っておいてくれないんですか！」

「プレッシャーかしら？」

「そうですよ…期待なんてしないでくださいよ…」

「杏さん…たしかに私たちは杏さんの元気な姿を、もう一度見たいと思ってる。

でも戦えるとか戦えないとかは関係ないのよ。

杏さんは杏さんで、勇者はただの肩書きでしかない。

私はただ、私の、ただのお友達の杏さんの体調が心配で来ているだけ。

だから杏さんは美味しい野菜をいっぱい食べて、素敵な本をいっぱい読んで、お見舞いに来た球子さんにタマにからかわれたりして、園子さん達に小説を習って、書いた小説を球子さんに読ませて逆にからかったりして、疲れたらいっぱい寝て、朝、目を覚ます」

「そうしているうちに元気になってしまうものだから、そんなことの心配はしてないわ」

「私、怖いんです…」

「なにが怖いのか？」

「タマっち先輩が私のせいで死んでしまうのが怖いんです…」

「死んじゃうくらいなら私なんか見捨てて逃げてほしい」

「わたしなんかのために死なないでほしい！！」

「…球子さんが聞いたら怒るわよ？」

「そんなのどうでもいいです…」

わたしなんか、どうなってもいいんです…

タマっち先輩が生きていてくれるなら嫌われたって構いません…っ

でも…っ！でもっ…！！そんなことしてもバーテックスにやられちゃう！

私じゃタマっち先輩を守れないのが…悔しいです…っ。歌野さん……っ！」

「そうね。私もいつか負けて、みーちゃんをバーテックスに殺されてしまうのがすごく怖いわ……でも……そうね…楓さんも言っていたことなんだけど」

「楓さんが…？」

「ええ、『生きていれば死んでしまう』し『生きている限り死んでしまう』たしかそんなようなことを言っていたわ……？『生きているから』だったかしら…？」

私たちは神様じゃなくてただの人間だから、できることをできるだけ頑張ったら、あとは運に任せる！それでも駄目なときは、とっっても悔しいけど、受け入れなきゃいけない」

「そういえば彼、この世界に来る直前に崖から落ちて死んだんだって、本当に何でもなかったのよ…あれには、さすがにちょっと呆れちゃったわ」

「諦めるしか、ないんでしょうか…」

「あら、意外ね。

そんなになっても諦めたくないだなんて、やっぱり杏さんも勇者なのね」

「私が死んでしまうのは良いんです…でも、タマっち先輩は…」

「それ、球子さんも同じことを言うと思うわよ」

「そう、ですね…」

『わたしなんか』なんて言わずに、やってみたらどうかしら？

やり切って負けるなら、負けは負けでも、ちょっとは違うかもしれないわよ？」

『勝つより負けることの方が難しい…』勝ちに固執して引き際を誤れば死んでしまうし、引くのが速すぎれば攻め入られてすべてを失う…けれど引き際良くとも攻めることを辞めてしまえばまた滅びてしまう……」

「少し元気が出て来たかしら？」

「はい。歌野さんのお陰で、少し気持ちの整理ができました。ありがとうございます御座います」

「突然元気になれるのも、それはそれで心配よ？」

「ふふっ、いえ、もう大丈夫です！やることも、調べることも、楓さんに聞かなきゃいけないことも沢山ありますから！塞ぎ込んでなんかいられません！

タマっち先輩を守るために！！未来も過去も変えてみせます！」

「そう、良かった。でも今日は折角だから、私が育てた栄養満点のベジタブルたちを食べて英気を養って頂戴！」

「はい！歌野さん！………歌野さん…布団に潜ってて気付きませんでした、段ボール何箱持って来たんですか…？」

「ノープログラムよ！何回か往復したけど、床が抜けるほどじゃないわ！…多分！！」

「だから本の量を気にしてたんですか！？」

「そうよ！！」

「こんなに私、食べられませんよ！！」

「そんなこと言わずに、やってみましょう！レッツら、チャレンジよ！！」

「無理なものは無理です——！！」

パン!

「もう何も心配しなくて大丈夫だぞ、あんず！！タマが来たからな！！」

「タマっち先輩！今日はなんだか特別カッコ良く見えるよ、タマっち先輩！！」

「なんだーあんずうー？タマが居なくてそんなに寂しかったのかー？」

「歌野さんが居たから寂しくはなかったけどそれより、歌野さんの野菜を片付けるの手伝って！」

「みいーとおー！！ あんずがっ！ あんずが、タマが居なくても寂しくなんかないって言うんだあー！」

「た、球子さん?!」

「そ、そこまで言っていないよ、タマっち先輩！歌野さんが居たから寂しくはなかっただけ！」

「あんずの薄情者ー！」

「タマは！タマはなあ！水都和一緒でも、寂しかったんだからなー！」

「タマっち先輩…！」///

「もうずっと歌野と一緒に居ろお！杏のおたんこなすー！！」

「ま、待ってタマっち先輩——！！」

「うたのん…何があったの？」

「ふふっ。大したことじゃないわ、みーちゃん」♪

「うたのん……………この段ボールは大した量だと思う…」

「そうかしら？みーちゃんも杏さんも心配性ね」

「須美ー……須ー美ー……」

「お須美さーん…？」

「あ…銀、どうしたの？」

「いやそれは須美のほうだろ……どうしたんだ、須美。園子もな」

「ミノさん…」

「楓さんは、いつも優しくて…何かと褒めてくれて…楽しい気持ちにさせてくれて……

私、楓さんがあんな人だと思ってなかった…

人を嫌いになるのが、こんなに辛くて苦しいことだったなんて知らなかった…」

「園子も須美と同じ感じか？」

「私は、まだ嫌いにはなれてないけど…このまま嫌いになっちゃうんじゃないかって考えるとすごく辛い…こういうとき、どうしたらいいのミノさん…？」

「難しいなあ…

アタシの場合は、不満があれば直接ぶつかってケンカして仲直りだけど、須美も園子もそういうこと苦手だろ？……お説教なら須美はよくやってるけど、今回はそういうのと違うし」

「銀は、楓さんのこと何とも思ってないの…？」

「何ともってことはないけど…そこはやっば確かめてからでないと分からないからな」

「確かめてやっぱり酷い人で、嫌いになっちゃったらどうするの…？」

「そのときは仕方ないさ…寂しいけど、お互いのために付き合いを改めるしかない」

「わたし嫌だよミノさん…カエデ先輩を嫌いになりたくないよ…」

「私も本当は嫌いになんてなりたくない…また前みたいに話したりしたい…」

「嫌いになりたくない、でも確かめて気持ちが決まってしまうのも怖い。ならいっそ、カエデさんのことを忘れてしまうのも手かもな…」

「そんなの嫌だよ！絶対に嫌だよミノさん！！
忘れちゃうなんて…そんなの、そんなの……う`う`っ…」
「そのっち…」

「じゃあ、時間に任せるしかないな。
カエデさんはカエデさんのままで変えられないし、アタシらの気持ちも変えられない。
どう転がるか分からないけど、成るように任せるしかない。

後悔したくないから、アタシはそういうのは御免だけど」

「後悔…？」
「そう。後悔。何か出来たはずかもしれないのに、神様に丸投げしちゃって気が付いたときには手遅れだ。なんて嫌だろ？」
「うん…」
「だからアタシは怖くても確かめるんだ。後悔しないために」

「私…楓さんのところに行ってくる……自分で…決着を付けてくる…っ」

「私も……怖いけど… 話してくるよ、ミノさん…」
「ああ…！でもその前に二人とも泣き止んでからな？…大丈夫だって、怖いこと言ってもカエデさんはカエデさんだし、そのときは銀さんも一緒だ…！」
「うん…！うん…！」
「ぎ、ん…！」

「よしよし、泣け泣け……アタシだってちょっとは怖いんだからな。まったく…」

=====

「お姉ちゃん大丈夫…？」

「ポンポン痛いよ、いちゆきい〜…！」

「うどん何10杯も、やけ食いするから…」

「だっで！だっでえ〜！」

「風。腹巻と梅昆布茶だ。温まる。夏凜も飲め」

「渋いチョイスね、棗…」

「んぐ、んぐ、んぐ……げっほごほ！」

「風。落ち着いて飲め。焦らなくていい」

「シクシク…」

「たしかにあの氏紙を連れて来たのは風だけど、しょうがないわよ」

「夏凜ーんん…」

「戻してましたけど、夏凜さんは大丈夫ですか…？」

「大丈夫よ…氏紙があんな趣味の悪い小道具まで用意してるとは思わなかったけど…

樹こそ大丈夫？」

「私は後ろに居て、声しか聞こえませんでしたから…」

「そういえば、そうだったわね…」

「棗も、分かり難いけど無理してたりしない？」

「ん…？私は平気だ」

「みたいね…」

「で…風。あんたよ。

整理が付くまで付き合っただげるから、溜まってるもの全部出さない」

「言えないわよ…あの日、楓さんは『後悔しないのか?』って忠告してくれてたのに…
それでも構わないからって頼んだのは私のほうだもの…」

「はぁ…じゃあどうするの? 犬吠埼部長」

「どうって…」

「しっかりしなさい。あいつの毒気に当てられすぎ。

過去は過去、今は今。今ある問題をどうするのかって話しよ」

「夏凜はどうするのがいいと思うんだ?」

「そっ、それは…その……あれよ……………」

「これまで無かった難しい問題なんだ。あまり風を責めないでやってくれ。一緒に考えよう」

「…私も、少し動揺してるみたい…ごめん」

「でも、どうすればいいんでしょう…」

選択肢

- 1 追い出す
- 2 調教する
- 3 慣れる
- 4 避ける
- 5 隔離する
- 6 動けないように生首にする
- 7 精霊サイズに小型化してマスコットにする
- 8 口を封じる

プブブ 「ん? 雪花からだわ。ちょっと出てる」

「まず追い出すのは無しね…罪悪感でうどんが喉を通らなくなっちゃう…」

「そんなことしたらお姉ちゃんが死んじゃう…! 絶対ダメ!!」

「調教は…どうやるんだ?」

「こう…樹のワイヤーとか歌野の鞭でキュッと……」

「お姉ちゃん…」

2

「フッフッフ。楓さん、随分とおいたをしてくれちゃったようですねえ」

「くっ…歌野さんに妹さん」

「ペシン、ペシン！昔は畑を耕すのにカウやホースを使っていたのよね！」

「まさか、その鞭でボクを…！こんなこと止めるんだ、妹さん！」

「だいたい楓さんは、いつまで私のことを『妹さん』呼びなんですか！

いい加減名前で呼んでくださいよ！」

「それは…恥ずかしいし…フッ」

「な、なんですか！ちゃんと私の目を見て言ってください！」

「この怖い御面も邪魔です！」

「あ…（シャラーンと謎の効果音とともに背景に薔薇が咲く美少年(大赦美術班制作)）」

「わぁお♪これは腕が鳴るわね！」

「こんな恥ずかしい顔…見ないでください妹さん…キララ」

「そ、そんなことないです…！//マツメ」

「どうしたんですか、妹さん？…やっぱり見られたものではありませんよね…キララリン」

「あっ…違うんです…その…もによもによ…」

「？すみません樹さん、良く聞こえませんでした。キラーン」

「は、はいっ！？いいま！？///」

「…？（アメシストを思わせる深く青い瞳はキラキラと煌めき、一点だけ灰かに朱が差している。ジッ…っと覗き見るとそこにはモジモジと頬を赤く染めた犬吠埼樹の姿が映し出されていた…）ジッ」

「あわわわわ////」

「始めるわよ樹さん！let's party night！！」

「歌野さんが正確な発音を！？じゃなくて待って歌野さん！」

ブアッ!!「えっ？なに、樹さん？」ブアッ!!

「あああああ…！ダメです！ダメです！中止です！！/////」アハ?

ブアッ!! ブアッ!! ブアッ!! ブアッ!!

=====

「だっダメ！ぜったいぜったいダメー！！///」
「どうした樹？顔が赤いぞ？」
「なんでもありません！なんでもありません！見ないでなひゅめさん！////」
「樹…？」
「もう！お姉ちゃんの変なこと言うから！！///」
「えっ、あたし！？」

選択肢

- 1 追い出す
- 2 調教する
- 3 慣れる
- 4 避ける
- 5 隔離する
- 6 動けないように生首にする
- 7 精霊サイズに小型化してマスコットにする
- 8 口を封じる

「慣れるのを待つのは、実質現状放置だな」
「そ、そうね…避けるのも虐めみたいだから無しね…隔離も同じく…」
「お姉ちゃん…生首にするって…なに？」
「猟奇的だ…」
「ほ、ほら！？楓さんって今機械じゃない！？だから首だけでもだいじょうぶかなって…」
「お姉ちゃん怖い駄目なのに大丈夫なの…？」
「ハイ…スマセン…オネエちゃんリデス…」
「口を…封じる…？……………風…」
キイダ カラッ…ゴ メンサイ…

「お姉ちゃんが、どんどん小さくなってく…………マスコット？」
キイダ カラ…
「風、これは」
ゴ メンサイ…
「ううん、お姉ちゃん。これいいかも…」
「ごめんなさい…………えっ？」

「ああ。できるかは分からないが精霊サイズなら」
「たまに毒舌だけど、いつもは優しくて可愛いマスコット！冴えてるよ、お姉ちゃん！」
「いや…私は小さければ迫力も小さいのではと…」
「そそう?! やっぱり!? いけるかなーって思ってたのよー!!!」
「風、雪花が……………なに? どうしたの?」
「夏凜さん! 解決しました!

名付けて『楓さんをお人形さんにしちゃおう計画』です!」

「なにそれ怖い…」
「夏凜、雪花がどうしたの?」

「あ、うん。雪花が『今日、家に泊まりの来ないか』って、私が吐いちゃったから心配してくれてるのね…」
「そう、良かったじゃない。行ってきなさいよ」

「風は来ないの?」
「あらなにい〜? 夏凜ってば実は結構本気で怖がったりい〜? しちゃったりい〜?」
「ち、違うわよ! あんたが深刻に悩んでるからいっしょに……………その…」//
「ちょ、ちょっとなによ…変なところで切られたら、こっちまで恥ずかしいじゃない…」

「風」「はひゃい!？」//
「?…若葉と歌野から連絡だ。明日——

=====

「では始めよう…」

「みんな分かっていることだと思うが、楓さんについてだ」

「本題の前に友奈から説明された通り、楓さんの中にはもう一人高嶋友奈がいる」

「このあと楓さんの話を聞いて、どう判断するにしても、そのことは理解しておいてほしい」

「楓さん」

「では引き継ぎまして私から皆さんへ」

「本当の私を知っていただくための自己紹介をさせていただきます」

「私は氏紙 楓（うじし かえで）」

「幼少の頃より毒親から虐待と洗脳を受けて育ちました」

「故に看視者と餌はあっても、私が保護者と呼べるものは生まれる前から存在しません」

「私は蟲が好きです。毒親に気を遣って玩具を強請るなどということはできなかったので、彼らが私の一番身近な玩具であり友人でした」

「早くに死の概念を理解した私は、私が消えてなくなることを恐れました。死を恐れました」

「学校では虐め、虐められ、虐めから助けたりと、西暦の頃はどこにでもいた子供です」

「虐待の経験がありましたから、既に私は私を隠しており、攻撃者たちは投影された私の幻影を殴るだけという状態を作っていました」

「なので虐められていた時期の記憶は殆どありません」

「高校に進学するころには毒親による洗脳を自力で解いていました」

「高校を卒業する頃、最初の分岐が訪れます。単に就職か進学かというだけですが」
「私は心身を整える時間を稼ぐために、就職ではなく家から遠い専門学校に進学しました」
「私は手先が比較的器用だったので言い包めるのは容易でした」

「実家という太いパイプ、命綱が私にはありません。生存が懸かっていたので、習得に不要な要素をギリギリまで削ぎ落とし、修学に時間を費やしました」
「友人も恋人もいませんでしたが、元からボッチだったため辛いとも寂しいとも感じませんでした。そして実際に技術の成績は、過去に遡ってみても優秀な部類だったと思います」

「次の分岐が訪れます。卒業制作で講師から期待の目を向けられました」

「私は『死後、私の五臓六腑を納める箱』が造りたかったのですが、講師から遠回しに否定され、生き急ぐ私は卒業後の地位を固める下心のために、講師の期待に応えるべく迷走を始めます」

「私は他者の協力無しに、速やかに造ることができない題材を選択してしまいました」

「自身の重い背景のこともあります」

「生存に必死だったということもあります」

「初めから独りで生き残ってきたために、他者との繋がりやの価値が理解できませんでした」

「今でも私にとって他者は蟲草と変わりません」

「ヒトという蟲は、ときより、積極的に私の命を脅かす不快な害虫でした」

「他者との間に深く線を引いていた私は、誰の助けも求めることはせず、卒業までのリミットを引き延ばすことにしましたが、修学しながら生活費も学費も払えるバイトなど、当然見付かりません。通える範囲の求人はすべて門前払いを受けました」

「私は奨学金を追加することはせず、記憶が曖昧ですが卒業式があったころに自主退学しました」

「私は挫折しました」

「今なら休学して学寮以外の近場の借家に住み着き、復権を目論むことが最善だったと分かります。しかし、そのときの私は既に精神を遣ってしまっていたので気付くませんでした」

「私は“あの家”に戻り、半年ほとんど寝たきりのような状態に陥りました」

「学習的無気力という言葉はご存じでしょうか？
努力のたびに努力が踏み潰されることで起こる虚脱症状です」

「何かを作ろうとすれば、必ず1~2割の僅かな最終工程ミスで産廃になりました」
「許容範囲の仕上がりの製作物を毒親に破壊されました」
「池を掘って見たら埋め立てられました」
「人付き合いを頑張ろうとしたこともありました。しかし好い人を演じても結局は私です。
必ず最期は致命的に破断させての離縁でした」

「意識が起こったところからずっと、私は何をやろうとしても尽く不運に踏み潰されました」

「私はホログラフィ製の無敵の虚身と、どんなに失敗しても何かに繋げる不屈の意志、そして道無き獣道こそを先陣切って突き進む一番槍によって戦ってきました」

「しかし、どうにもならなかったのです」

「自身のことなら自己洗脳、自己暗示、自己誘導で、どうにでもしてきました」
「しかし他人の目は運に任せるしかなかった」
「天命に身を委ねなければならないことを極度に嫌った」
「私の出生(ハンデ)も、天命により齎されたから」
「私は神に殺意を覚えた」

「私に『私の死よりも忌避すること』ができました」

「半年」

「鬱により思考を完全に断ち」

「身じろぎひとつ行わず」

「顔に止まる羽虫の痒みも意に介さず、ただ横たわっていた」

「身体が鉛のように重い」「常に鈍く頭痛がする」「締め切った部屋は空気が薄く澱んでいて息苦しい」「視界は暗く彩度がない」「何を観ても読んでも食べても自慰さえも味気なくつまらない」「眠ること以外の欲求が失われていき身体が動かなくなる」「意識と身体が剥離している」「奇声を上げたくなくても面倒くさくてできない」「現実が遠く他人事に感じられる」

「偶発的に近付いていたので、知識はあった仏教の止瞑想という状態に寄せました」

「瞑想によって少しずつ意識が浮上していきましたが、長期間の止瞑想維持の後遺症で、以前のように頭も体も働きません。スペック七割喪失で私のハンデが増えました。回復の見込みもありません」

「しかし仏教を習得したことで、死は最早恐れるものではなくなりました」

「私は私と世界を再定義しました」

「死恐怖症(タナトフォビア)を解きました」

「鬱からの自己治療に自己肯定感が必要だったので、半年かけて一人を口説き倒して彼女を用意したこともありました。しかし周りの人間関係を維持できず、嫌がらせのような言葉を添えて冷酷に突き放しました。今も恨まれているかもしれません。もはや確認する術はありませんが、私のことを嫌って早々に忘れてくれたら幸いです」

「退学以前から、何を食べても砂か粘土のように感じられます」

「味蕾は味を捉えているはずなのに味わうことができません」

「“あの家”での食事は例えるなら、比喩するなら、

『食物の上をゴキブリが走り回り、肉には蛆が沸き蠢き、口に運べばハエが顔に襲い掛かってくる』そんな苦行か拷問のようなものだったと想像してください」

「それでも私は喰らいました」

「このまま彼らに殺されるとしても、ただで死んでやるつもりは無かった」

「諸悪の根源であるこの血筋を抹殺するために一族郎党皆殺しです。

女も子供も、赤子の頃から目を掛けてきた従妹も区別無く、全員殺す気でした」

「寮に入っていた兄から声が掛かりました」

「毒親も毒子も、私のように見かけは善良な市民ですからね」

「違いは、私がある程度意図して毒を扱えるのに対し、彼らは全くの無自覚であることです」

「自身の罪深さを認知できぬもの。自覚できぬものに言葉は意味を成しません」

「洗脳が効いていたころの私などは、国土さんの影を見るほどに純粹で善良でした」

「羽虫一匹殺すのは勿論、名も知らず区別も付かない雑草を踏み折るのさえ躊躇しました」

「なので鳴き喚くセミを、生きたまま食い殺すことで一線を越えることにしました」

「セミは他の蟲と違って、自存在を鳴いて主張するんですよ」

「手にしたときの重さやサイズ感も五感で判じ易く程よいです」

「姿は見えずとも啞えた齒の上で声がして、私に生きていることを煩く伝えてくるんです」

「それがひと咬みした瞬間に消えるんです。シンと何も聞こえなくなるんです。

私のせいで命が無くなるんです」

「私は命を喰らうことを覚えました」

「殺すことを学びました」

「命の質感を知りました」

「すべてを奪われ失っても生き残るために、何かは何かでなければならぬというような観念を風潰すことにしました」

「ゴキブリに生理的嫌悪を覚えていたので、偶然拾った卵鞘(らんしょう)を孵化させ、飼育観察を始めました」

「ゴキブリに対する嫌悪の根源を突き止め暗示を解きました」

「今では殖やしたゴキブリを炙って食べることもできます」

「私は私を生み直し、育て直し、やり直し、直す必要があると理解しました」

「私を育てるための城を得るために

空き家を借りるために、リスクを負って祖父の名前を借りました」

「契約に必要な書類が揃い、あとは送るだけというところで

空き家を見に行ったときには元気だった地主が急死しました。契約は白紙になりました」

「あの忌まわしく、不快極まる性根の腐ったアイツのせいです」

「また神が私の作業の邪魔をしました」

「許せません」

「私は神を騙り始めました」

「死ぬ気など生温い。私は『殺す気で』生きました」

「止むを得ず、派遣のバイトを転々とする日々が続く」

「定期的に無職になり」

「マイナス十数度の凍てつく環境下で、半年以上ホームレスをしていたこともあります」

「私は職が無くとも死ななくなりました」

「生存に目的が無ければ、法の枷が外れた無敵の人となったでしょう」

「十年近くかかってしまいましたが

資金を貯め終え、やり残したことを終わらせに再入学しました」

「前回の最終学年の後半は、履歴書や職探しに追われて完全に不登校状態でしたし、病んで大事にしていた副職長に酷い言葉を吐き捨てて退学しましたから、当然、白い目で見られ続けましたね」

「まあ、そんなことは、もはや私に何の威力も持ち得ませんでした」

「すでに履修した実技をやり直しても仕方がないので、初めからすべての要素が入っている課題を自分で書き起こして早々に制作し、“実技で作ることになっていた課題”のミニチュア制作も完了し、卒業制作を開始」

「前回の失敗は他人を気にして己が欲するものを蔑ろにしたことです」

「今回も箱を課題にしました」

「例えまた講師に否定されたとしても関係ありません」

「ついでに期待に応えたければ箱の後にまた別に作ればよい。それだけのことでした」

「木工芸の履修課程を1年で完了させた私は、金工芸課程へ編入し、事前につけておいた轆(ふいご)を用いて鍛造を習得し、いつか私を殺すための刃物たちを制作しました」

「会社を興しました」

「何かを作る技能と、知識と、多様な職場の経験だけは手元にありました」

「知識教養は何者にも奪われない、貧者が強者に抗うための最後の剣です」

「その剣を振るい開拓し、山を購入しました」

「私は無職やホームレス、虐待や虐めによって社会から外れたものを雇用条件にしました」

「私は彼らに社会的地位となる『山守の氏子』の肩書きを与え、住処を与え、食物を与え、生存の手解きを始めました」

「箱を納めるための社を建てました」

「これであとは

私の役割を完遂して

私が作った刃物を腹に埋めて(うずめて)私を殺害して

私が作った箱に私を詰めて

私が作った社に私が入った箱を納めて

私が育てた氏子たちに私を祀らせて蛆と神へと成るだけでした」

「しかし私は私の役割を終える前に、崖から落ちて死にました」

「またアイツらに私の邪魔をされました」

「もう少しでアイツらの喉笛にも手が届くはずだったのに、殺し損ねてしまいました…」

「ここまでが私の一生です」

「まあ、そうですね」

「こんなことを聞かされても反応に困りますよね。すみません」

「つまるところですね。私にとって貴女たち以外の人間の命など塵芥(ごみあくた)同然、取るに足らないどうでもいいものなのです。むしろ天神に味方して一掃したいくらいですね」

「あの邪神はその表出にすぎません」

「楓さん…」

「若葉さん、乃木さん、郡さん、上里さん、高嶋さん、赤嶺さん、弥勒さん、桐生さん
わざわざ、最後に、このような場を用意していただき有難う御座いました」

「神奈さん…いずれそうなるとはいえ、せっかく降りていらしたのに私などと二人きりにしてしまいます…申し訳ありません…」

「名残惜しいですが、今度こそ、さようならです」

「私は皆さんの前から姿を消します。学籍も戸籍も抹消します。

今後は私本来の所作の黒子(くろこ)となって、陰から皆さんを手助けることに徹します。
これまでの、楽しく愛しい日々を私に下さって有難う御座いました。

さよ 「待^どって！！」

「待ってよ楓さん…」

「乃木さん…？」

「どうして、一人で決めちゃうの…？私達に相談してよ…」

「人一人を追い出す選択は心苦しくて、善良な貴女たちには出来ませんからね」

「あなた達に受け入れる以外の選択肢が無いのだから私が決めます」

「あなた達は私ではないのだから、私の選択を認めない権利はありません」

「私の行動を規定するのは私の意思です」

「最後の最後に、また傷付けることとなってしまって申し訳ありません」

「けれどそれも止むを得ません」

「あなた達は誰も拒絶できないのですから」

「私があな達を愛してしまったのですから」

「あなた達が取るに足らないその他大勢であったならこうはならなかった」

「ならば私からあなた達を拒絶します」

「関係しなければこれ以上傷付けてしまうこともない」

「一時的に関係したことが呪いとなってあなた達を蝕むようなら、その記憶も焼却させていただきますので問題ありません」

「私が私とあなた達の間、消すことも越すことも叶わない線を引きます」

「あなた達に選択の余地は与えない」

「楓くん…本当にこれでいいと思うの…？」

「はい」

「無かったことにすればいいなんて、楓くんらしくないよ…？」

「無くなるのはこの場だけで、私そのものは引き継がれるので問題ありません」

「みんなの気持ちは、どうでもいいの…？」

「まあ、極論そういうことなのでしょうね…」

「私はきっと、本当は私しか愛していないだと思います」

「だから未練がましくこんなところに、のこのこと顔を出せるのでしょうかね」

「どうせ記憶を消してしまえばいいし、こうして切り刻んでしまえば消さざるを得ない」

「……そして高嶋さんを致命的に傷付けてしまうんですね……ごめんなさい…」

「若葉さんも……ぬか喜びさせてしまいましたよね…ごめんなさい…」

「なんだからもう駄目ですね…面倒になってきました」

「いい加減にしてよ！！」

「楓くんはこんな投げ出すみたいな諦め方はしない！！」

「気をたしかに持って！！楓くんは神様が嫌いなんでしょ？！」

「友奈…？」

「自分を思い出して！！戻ってきて！！負けないで！！」

「？……何の話ですか…？」

「…！！神ゆーゆ、ありがとう！あとは私たちに任せて！！」

「園子ちゃん…！お願い…」

「…？」

「ねえ、楓さん」

「何でしょうか乃木さん」

「楓さんは人も神様も嫌いなのに、どうして神様の力を宿す人間の私たちが好きなの？」

「園子…？」

「？……ああ、そういえばその話はまだでしたね。

がっかりするだけだと思いますけど聞きたいですか？」

「うん。話して」

「そうですか…」

『私は特定の人物の特定の要素に関係なく愛することができる』と以前お話ししましたね」

「なので、あなた達がヒトであろうと神であろうと関係が無いんです」

「私が私に

『あなた達のことが好きだ』と暗示を掛け

『好きである』と定義し

『愛している』と私に誓いを立てた。ただそれだけのことなんです」

「つまり私にあるのは自己愛だけです。誰も愛してなどいないから誰にでも愛を囁ける。

まったく面白みのない話でしょう？」

「そういうことなので加賀城さん。貴女はとっとと私のことなど見限りなさい」

「氏紙さん…」

「今の話理解できたか御前？いい加減にしろよ？俺が御前を好くことなど起こり得ない。私が誰を好くも嫌うもワタシの意思次第だからだ。たった一度、まぐれで救われただけのことが忘れられないのなら 100 年の恋も冷めるような醜悪な憎悪をぶつけてあげようか？」

「いやっ…！やめて！！……やめてよ…っ…！」

「楓さん、もう辞めようよ…楓さんはこんなことしたくないはずだよ？」

「もはや手遅れです」

「ううん、そんなことない。

楓さんが楓さんを忘れてしまったのなら、私たちが思い出させてあげる」

「……氏紙 楓さんはね？」

すっごく女誑しで26人もいる勇者部員全員の素敵なところを、其々すっごい長台詞で言えちゃうくらい私たちのことを良く見てくれてる人。それでね？そんな女誑しさんなのに私たちが触れられたくないところには絶対触らないし、男の人の腕力で無理やり迫ってくるようなことも絶対がない紳士さんなの。

口説き文句も、ときにロマンチックに、ときに男らしく真っ直ぐ目を見つめて、ときに冗談に乗せて、ときに不意打ちするようにさり気無く、ときに長文で捲し立てるように、ときに優しく頭を撫でるように、詩的に、情熱的に、熱烈に、苛烈に、誠実に、スマートに、最近乙女チックも追加されて、もうあの手この手でね。手を変え品を変えて私たちに飽きさせないんだよ。

氏紙楓さんは、いつもお道化て私たちに笑顔にしてくれて、おふざけには毎回乗ってくれるし、私たちが何かするたび、ことあるごとに褒めてくれて一緒に居るとすごく楽しいし、あ、でもね、女誑しさんだから私たちとそういうことがしたいのかなって最初はちょっと怖かった…でも付き合ってみると楓さんは全然真逆で、手を繋ぐのが精々だし、ハグなんて、腕を広げて構えただけで照れて逃げ出しちゃうの！走ったり、机を跳び越えたり、ミノさんを盾にしたりもう大暴れ！ふふっ…あのときの楓さんはすごく可愛かったな～♪

氏紙楓さんはノリがいいとか、お調子者なだけじゃなくってね？辛いときは落ち着いた調子でゆっくり優しく話してくれてとても安心するし、真面目モードのときはずっと真剣な目になって淡々と話すの…その言葉の節々から私たちへの思い遣りが伝わってきて、本当に私たちのことを良く見てくれてるんだなあって…私たちを口説くときに言ったセリフも冗談じゃなくて本気なんだな…って分かって、そのギャップにちょっとドキッとさせられたりもして…でも、誰ともそういう関係になることは無いんだなってちょっと寂しくも思ったり…

氏紙楓さんの裏の顔は神をも恐れぬ大魔王。でもその魔王様はね…みんなに酷いことを言ったり虐めるけど、本当は皆とお友達になりたいの…。でも魔王様にそのつもりが無くて、近くに居るだけで強い魔力と瘴気でみんなを苦しめちゃうから……だから魔王様は寂しくても、辛くても、独りぼっちでいようとするの…自分が止められなくなって、いよいよ世界が危ない！ってなると、悪逆非道を演じて私たち勇者に自分をやっつけてもらおうとする…なにかが少し違っていけば本当は勇者だったかもしれない優しい魔王様なんだよ…」

「園ちゃん…」

「だから思い出して…帰って来てよ…。こんなの誰も幸せにならないし救われないよ…」

「…私はあなた達のように誰かを救えるような大層なものではありません」

「私の役割演技に惑わされているだけです」

「そんなことない！！私は実際に命がけで氏紙さんに助けてもらったもん！！」

「加賀城…」

「私は楓さんに邪神として酷いことを言われましたけど、実際にあの未来は起こり得ることでした。あの言い方はさすがに酷すぎるとは思いますけど、本当の死の実感を持って教えてもらった気がします…あの言葉のお陰で、タマっち先輩を絶対に守り抜く決意を固めることができました」

「私も邪神様に悪魔の囁きで誘いを受けた…でもあの言葉も、ああいう局面や演出でなければ、私たちへの思い遣り溢れた言葉でした。世界を滅ぼそうとした私の罪にさえ理解を示して、味方であろうとしてくれていました。そう思うと少し…胸が暖かくなります…」

「人質の件も裏返せばそうよね。一時の感情で衝動に支配されて冷静さを欠けば、あっという間に大事なものを取りこぼしてしまうかもしれないという警告だったわ」

「私たちには何かの事情で敵対した仲間への心構えが足りていなかった…躊躇して対応が遅れば、取り返しの付かないことにもなり得ると教えられた」

「ええ、さすがに血だまりに浮かぶ人影とかは悪趣味すぎるけど、精霊バリアも完璧じゃない……実戦で、もし仲間が…酷い殺され方をしてでも戦い続けられる胆力が必要だった……まあ、そんなことはこの完成型勇者が絶対させないけど！」

「タマは…タマはちょっとよく分からんけど、なんかいい感じの台詞だったんだろ…？タマは知っている…ツンデレってやつぁ…みいんなそうなんだ…。それに大人なタマは、ちょっと、おイタされたくらいで根に持つようなタマじゃあない…ンダア…」

「私は今でも楓さんが信じられないし理解もできないよ。でも楓さんに酷いこと言われたはずの人たちの話を聞いたらさ…私が理解できない言葉の裏にも真意があるんじゃないかって勘ぐって憎み切れなくなっちゃった……楓さんは酷い人だね…」

「…ね？楓さん。楓さんさえ手を伸ばしてくれれば、私たちはやり直せるんだよ」

「…今回たまたまそうなっても、次や、次の次が起こります」

「なら早めに縁切りするのが一番傷が浅く済む」

「ほらまた私たちを気遣ってる。あなたのそういうところよ」

「違います。そんなんじゃありません。

私は私が大好きなので、気障ったらしく振舞って自己陶醉しているだけです」

「フッ、楓が思わせぶりなのはいつものこと」

「性別も歳も違うし、義体だし、仮面付けてるし、楓さんが本当は何を考えてるかなんて元から分かりませんでしたよ」

「棗と、どっこいね」

「私はそんなに分かり難いのか…」

「だから楓さんが、どういうつもりかなんて関係無いんです。私たちは嬉しかったから」

「楓さんは義体になる前、樹の手料理を苦笑いしながら完食してくれた……呼べばいつでも食べに来てくれた……いつだって…！いつだって笑顔で…っ！うおおん…っ！」

「樹さんの料理を何度も笑顔で…だと！」

「それは…ベリー・デンジャラスね…」

「凄い精神力だ…誰にでもできることじゃない…」

「私たちに殺されるなら本望だってあれ…本気だったんですね楓さん…」

「漢気を感じます…！」

「うう…」

「気にする必要はありません妹さん。

ゆっくりでも歩いて（方向さえ正しけ）れば前には進むんですから」

「楓さん…！」

「女誑しも、ここまで来ると聖人のように見えてきますわね…」

「仏教を遣っていらしたそうですし、影響を受けているのかもしれないね…」

「未来人、女誑し、ロボ、邪神、怪物、氏神、魔王の次は聖人って…楓さん肩書き盛りすぎ」

「うっちーのお笑い魂も忘れたらあかんで、アカナ」

「聖人なら、もう怪談は止めてほしい…」

「怖がらせないと、もう一人の山伏さんに会えないじゃないですか」

「えっ氏紙さんシズクも口説く気なんだ…保健室送りにされたのに…」

「美少女から身体が宙に浮く程度の威力の拳を急にプレゼントして頂いただけですよ」

「中でシズクが恥ずかしがってる気がする…」

「照れるとお隠れになってしまうので、もう一人の山伏さんの愛らしくそして艶麗(えんれい)な微笑みを拝謁(はいえつ)叶わないのが非常に残念でゴフッ?!」

「しずく!？」

「…この目にも留まらぬ必殺の拳……………」

「反射的に体が……言葉の意味は正確には判らなかったけど私もすごく恥ずかしい…」

「楓先輩、大丈夫ですか…？」

「機械なので。今のは山伏さんの拳のほうが危なかったですね。上手く柔らかい部位で受け止められて良かったです」

「楓先輩は邪神様なのに、お優しいんですね。芽吹先輩の言った通りです♪」

「楓さん調子が戻ってきたみたい…！」

「よくよく思い出して神奈さんの言葉の意味に気がきましたので。皆さんのお陰です」

「…！それじゃあ！」

「はい。危ないところでした。もう暫くお付き合い頂けると幸いです」

「そうか！機械だから叩けば良かったんだな！斜め 45 度で！」

「そ、そんなことしちゃだめだよタマちゃん…！」

「そういえば…そのっちは気付いていたみたいだけど、どういう意味だったんですか？」

「つまりは『また神の思う通りになってしまっているのか？』ということだったんです。

絶縁していたら恐らく『勇者は中立神の試練に失敗した』と判断されていたのでしょうね。あいつ等は私に似ていて外道なので、そうしていたんでしょうね、忌々しい…」

…あんクソ共は……………絶対に……………

「ひっ…！邪神様モード?!」

「怖いよカエデ先輩…！」

「ダメだよ楓くん怖がらせちゃ!!」

「えっ、あれ、仮面で表情とか分からないはずなのに…」

「気配で分かんよ！」

「まじか勇者すげえ…」

「でも、どうでしょう…」
「どうしたの杏ちゃん？」
「今回の試練は何とかなりでしたが、楓さんの仰られた通り何度も耐えられるとは限りませんよね…優しい普段の楓さんとの落差もあって、邪神様モードの楓さん怖いでもん…」
「加賀城さんも先ほどはすみません…」
「あまり懐かれるのも困ってしまいますが、愛していますよ」
「びい?!////」
「[ビュオオオオオオオオオオウ!!!!!!!!!!]」
「杏っ…!!雀が…!雀が倒れたあああ!!目を開けてくれ雀えええ!!!!」
「なんて満たされた顔をしていますの…」
「上げて落とすの逆ね…」
「恐ろしい…」
「ああ…また風が、風が吹いてきました……これで明日も生きられる……」
「邪神モードもあれだけど、誑しモードもどうかしてほしいわ…」
「ぶっちゃけ、ただ単に好意を正直に話してるだけなんですけどね。包み隠さず」
「ちょっとは包みなさいよ!!」
「ええじゃないか、ええじゃないか、わっしょいしょい」
「こ……こ…いつ…##」
「まあまあ、この御握りでも食って落ち着きくださいニボシ様」
「誰がニボシ様かっ!エボシ様みたく言ってんじゃないわよ!!…どっから出てきたのよこの御握りは!!?」
「エボシって聞くとカツオノエボシが一番に頭に浮かぶよね。特に意味は無いけど」
「カツオっ?!」
「弥勒…カツオノエボシはカツオじゃない……クラゲ」
「ヒドロ虫の群体ですね。ガラス細工か一部の曇りもない完全に透明な氷のような身体に発色良い青色が透き通って非常に美しく、全くもって妙美であると賛辞を贈らずにはいられない生物で、高貴で秀麗な弥勒さんが装飾品として身に着けることができたなら、それはそれは美しいことでしょう、しかし浜辺に打ち上げられているのを見付けても絶対に触っちゃだめですよ?最悪死にますからね?弥勒さん」
「し、知っておりますわよ…!?勿論…!」
「ああ…あれは恐ろしくも美しい海の宝石だ…」
「海洋生物は詳しい方ではありませんが、機会があれば語り合しましょう古波蔵さん」
「ああ…!そのときは陸の生き物のことを教えてくれ」
「アタシも聞きたいですカエデさん!」
「魔王さん!その話、この農業王も参加させて頂きませう!」
「It is a great pleasure, Your Majesty. (恐悦至極に御座います)」

「…………尊かった風が…いつの間にか男の子たちが好きそうな潮風に……………はっ?!
まさか棗さんまで!!?」

「…そういえば私たちが男の子だったとしても口説き倒すって言ってたっけ楓さん…」

「BL…!!BLの風も操れるんですか楓さん!!?楓さん素敵です!!!!」

「なるほど勇者部内の性別を反転させて……………おおっ?!おおお?!創作意欲がわいてきますなあ!!」

「そのっちがまた私の知らない領域に昇っていく…」

「歓迎会のときの冒頭のアレ…そういうことだったんだ…」

「腐ってやがる…遅すぎたんだ…」

「楓さんが原因ですよね…?というか楓さんもそうですよね…?」

「少女たちよ。性別如きに囚われる勿れ。

少女たる鳥よ。自由であれ。

鳥よ。誰より高みを目指して飛翔するのだ。

御前には想像力(妄想力)という自由の翼があるのだから…」

「カエデ先輩…!」

「そのっち…!そのっちは、まだあの領域まで行かないで…!私を置いてかないで…!!」

「もう滅茶苦茶だよ…何の話をしてたんだっけ…」

「た、たしか楓さんの邪神様モードをどうしようかというお話だったかと…」

「それがどうしてBLの話に…」

「ねえ郡ちゃんBLってなに？」

「…!…………ベーコンレタスのことよ…高嶋さん…」

「そうなんだー

「なんだか、お腹空いてきちゃったね、結城ちゃん♪」

「そうだね、高嶋ちゃん♪」

いろんな事がありましたね。楓さん。
みんな一生懸命頑張ったけど、変えられなかった。

杏さんも球子さんもバーテックスにやられてしまったし
千景さんは歴史から消えてしまうところだった。

きっと、ひなたさんと若葉さんが尽力なさったんでしょうね。

私があの世界のことを思い出したのは、ほんの三年前です。
どうして今になって思い出したのでしょうか？
いいえ、分かっています。
思い出せない未来を、楓さんが観測して確定させでしまっていたのでしょう…
だから他のみんなも思い出せなかったんじゃないかな……

でも…もしかしたら楓さんが来る前の世界とは少し違ってるのかな…？
そうだといいな…

思い出してからは勇者部のみんなで楓さんを探して探して…北海道にも行ったんですよ…？でも見つけられなかった。四国の外は広すぎますよ、楓さん…

楓さんは、もう死んじゃってるんじゃないかって、悩んだこともありました。だって顔も分からないんだもん。諦めたくもなるよ。でもやっと見つけた。

見つけたのにね……………あんまりだよね…
こんなのは酷いよ……………優しい楓さんが神様を恨むはずだよね……………

やっと見つけたのに……………それが楓さんが死んじゃう瞬間だなんて、ひどいよ……………

「……つらいよ楓さん…っ！目を開けてよ…！！」

まだこんなに温かいのに、どうして目を開けてくれないの…！！
どうして、こんなにやつれているの…！！

「話したいことも、一緒にしたいこともいっぱいあるんだよ…？」
「まだ死なないでよ…楓さん…」

楓さんは、もう皆のところに行ってしまったの……？
寂しいよ…

「あのね、楓さん……」
「みんな楓さんのことが大好きなんだよ…？」
「雀さんだって待ってるんだよ…？」

「…私たちに記憶を残すために、楓さんは、どんどん人から遠ざかって行って」
「神奈さんが、これ以上は無理だって、危険だよって言ったのに」

「楓さんは諦めずに何度も何度も何度も
自分の命を実験台にして、最後の方は楓さんなのかも分からなくなって」

「私たちが怖がらせないために…！
不安にさせないために、楓さんの人格を写した義体に影武者までさせて…！！」

「それがバレたら今度は私たちに偽物の記憶を植え付けて…！」
「楓さんは神奈さんを私たちのところに残して………！…」

「それでも…！それでもね…私たちが現実世界に帰るときには戻って来てくれた…！」
「だからきっと上手く行ったんだって…楓さんの努力は実ったんだって…」
「私たちは安心して帰れたの……なのに」

「ねえ、楓さん…楓さんはそれでよかったの…？」
「こんな結末でも後悔しないの…？」

「『冗談だ』って…笑ってよ…」
「泣いてちゃ美人が台無しだぞって…また私を口説いてよ……」

=====

=====

=====

=====

=====

「…楓さん……」

せめて楓さんがあの世界に旅立てますように…

「もし…っ」

「起きるのだよ…もし」

私は楓さんの心は読めないけど

「神は言っている…お主はまだ死ぬ定めではない…と」

これは気休めだから…お祈りだから…

「まあよい…そのまま聞かれよ…」

「困難に立ち向かい…ときに挫折し絶望し、しかし何度でも立ち上がり、神頼みもせず己の脚で歩き続けた……お主のようなものが好きでう…」

==

「わしは、宿命に挑むも特に幸福になること……なく、

求めた成果も手にできないまま無情に死んでしまうお主を不憫に思い…

蘇生はできぬが……せめて冥途の土産に過去へと

送り…っ、別の選択肢を辿った先に何があるのか見せて『あのとき、ああすればよかった。
こうすればよかった』『あの子に告白しておけば良かった』というような

後悔や無念を晴らしてもらおうとな…？」

「永眠しようとする…お主の夢枕に生えた神樹じゃよ…」

「うむ……………それでこそじゃ…。だから人間は素晴らしい…」

「益々気に入った…」

「意に沿わないかもしれんが、その不遇な運命を負わせることになった一柱からのお詫びとでも思って受け取っておくれ……………おまえ……………タイムリープ、してね……………」

しかし神樹だけでなく、勇者システムまで無くなっていたとは想定外だった。
責任を取って次は私が跳んでみようか。

「…?!」

「悪趣味だよ…っ……こんなの………！」

「仕方がなかろうよ。

大赦の協力なしに、こんな超スペックな依り代を用意しなければならなかったのだ」

「だから乃木園子………いや……勇者よ。私は」

魔王はここに居る。(氏神でも可)(なんなら邪神様でもよし)。

「…ふざけないでよ………感動の再開が台無しだよっ………魔王様…」

「じゃあもう泣き止むんだよ。私の愛しい愛しいお嬢さん」

「さすがに『お嬢さん』なんて歳じゃないよ…？」

「下らんなあ。実に細やかなことよ。

いったい、アイツらに何周させられたと思っている。…あ、これ話してなかったっけ？」

「まあいいか」

「というかさあ、もう君ら其々嫁だって居んだからさあ。

私なんか探してどうする気なのよ。後ろ見てないで前を向こうよ」

「見てたの…？ずっと…」

「いいや？史実イベント幾つかスキップして会社興して落ち着いてからかな」

「会いに来てよ…大人の楓さんの顔、私たち知らないんだよ？」

「その話は『私の記憶がいつ戻ったのか？』という、ちょっとした小話を挟まなきゃいけないんだけど良いかな？」

「うん…」

「ありがとう。私の記憶が戻ったのは天神降臨のあのときでね？」

「やっぱり生身で樹海送りにされたんですよ」

「え…」

「……………あそこに……………居たの…？」

絶句もんですよね、ほんと。

まじ GOD あいつ等、鬼畜道を極め過ぎてる。全力で殺しに来てる。「俺ねーちゃんに殺されそうだし御前もついでに死んどけ」てきな？ギャグマンガのノリでホイホイ殺してんじゃねーよ、ファッキン。

「まあ死にますよね。で一回、死んだんですよ」

「ちょ、ちょっと待って…どうということなの…」

「いや、どうってこともなく死んだんですよ」

「じゃあ、この生身の楓さんは誰なの……………えっ…こわい誰、あなたも誰、えっえっ」

「落ち着こう…？」

私は私たちで私だから私なら私なんですよ」

「……わかんないよ…」

「まあ一回死んだくらいで死ねないのが私ってことなのさ。そんな感じ」

「……わかんないよ…」

「まあ気にしなさんな」

「気にするよ…！無茶言わないでよ！！楓さんじゃなかったら私、知らないおじさんの遺体に話しかけて抱き抱えちゃってるってことなんだよ？！無茶言わないでよ！！？」

「だからソレも私だからきにしな—いのっ」

「説明してよお…楓さん……………」

「ふはは。狼狽える園子ちゃんもキュートだね。素敵に新鮮で良いよ」

「むむ—っ……………」

「まあでね？死んだあと直ぐ神樹の中に潜って」

「記憶を座標に、根の国探索の経験も総動員して 300 年を行ったり来たり、自力でみんなに会いに行ったのさ。ただ、お気付きの通り、ここの時間に繋がる確定済みの歴史は変更できないみたいでさ。それなら曖昧で不確定な死後…死の瞬間になら立ち会えるだろうと向かったのが大当たり。臨死体験に介入して記憶を移植してラストバトルに介入してやろう ZE☆っと頑張っていたのに若葉さんがですよ…

私がいっぺん死んで根の国経由で時渡りしなきゃならなかったのに対して、若葉さんは精霊化して神樹内の時空間が曖昧なエリア…まあ、あの世界が位置していたんであろう場所へ侵入し『私に続け！』と一言号令を掛けただけで勇者も巫女も鎬矢も防人も全員集合………私が死人しか集められないのに、若葉さんは時間軸無視して生者まで先回りで集めてました……何のために私は死んだんでしょうね…。そんなこんなで天の逆手と救世主の元にみんなを送り出しましたとき…」

「そっか…若ちゃんが……………」

「そういえば、ゆーゆも会ったって言ってたっけ…私も会いたいな…」

「今も何処かには居るんだろうけど…

「基本は青鳥だって言ってたんで、会っても話せないかもしれませんね…」

「あれ…？結局、楓さん死んだままだよね…？」

「そうだね、死んでるね」

「そんな心配そうに…いや、めっちゃ困惑顔だわウケルー☆」

「楓さん…」

「……説明が難しいんですよ…私は既にヒトではないので世界の法則が違います…」

「本当に神様に成っちゃったの…？」

「何でしょうね…？」

悪魔か、死霊か、妖怪か、どれでもないバケモノか…まあ神でも良いです」

「私は時間にも空間にも束縛されず、数多の私たちの記憶の何処かにいる」

「そうなあ…私というユーザ登録がされていて、物理ネットも電子ネットも切断されているコンピュータ間を時間も世界も空間も無視して自由に往来可能で複製も出来て、宇宙っていうすべてを包括した巨大サーバの海も自由に泳げるみたいな…やっぱ難しいな」

「ううん、分かったよ。楓さんは仏さまに成ったんだね」

「ふはは、死んだるしのう。さすが園子さんジョークが効いてるぜ。

さしずめ義体は高性能な仏像か。仏彫すっか。

まあ本当に御仏かっていうと、まだ私以外の記憶には入れないからモドキだな」

「その肉の身体は、あの世界に行く前の私だよ。ガリガリに痩せ衰えて無残なものよ」

「子供はいないの？」

「君たちより素敵な人は居なかったからね」

「他の世界線には居たんじゃない？」

「それはそれ、それはその世界線の私のものよ。この私じゃない」

「へんなの。自分は世界も時間も越えて、すべて自分だって楓さんは言うのに」

「私にも色々居るのだよ。異世界ガイドなんてやってる不可思議な私まで居るんですよ」

「なもんで私は生涯独身ですね、園子さん」

「ごめんね。楓さんのことは大好きだし愛しているけど、私には愛する家族がいるの」♪

「知っとりますわ。そういうんちゃいますわ」

「ふふっ、ちょっと拗ねてる？」

「煩いわい。なんで私を探したりしてんですか皆さん」

「“寂しがり屋なのに強がって独りでいたがる可愛いお友達”に会いたいと思っちゃダメ？」

「構わんけどさ…」
「じゃあ行こっか」
「ほう？何処へ？」
「もちろん、みんなのところへだよ」
「人妻口説くわけにゃいかんから会い辛いなあ」
「会いに来てくれなかったのって本当はそういう理由なの…？」

「ははっまさか……」
「ええ…そんなことなの…」
「…どうせ私が死ぬまで記憶は戻らないし、みんな其々の一生を生きているわけで」
「どうせ私の手がかりも無いのだし、忘れてくれるだろうと思っていたのにこれだもの」

「忘れられるわけないよ」
「忘れておくれよ」
「嫌だよ」
「やはり、形見の仏像の一つでも送り付けるべきだったか…」
「そうだね。そうしてくれていたら乃木家の力で、すぐ特定してあげられたのになー」
「怖いわ園子さん」
「よしよしかえでちゃん、怖くないよー♪」
「やめんかい」
「ふふふっ♪」

「分かりました。観念します。何処へなりとお付き合いしますよ」
「逃がさないからね？」
「『絶対に』もう、あなた達からは逃げませんよ。神奈さんにも監視されてますからね」
「神ゆーゆも居るんだー。せっかく楓さん独り占めできると思ったのになー」
「居るって言っても若葉さんの的な感じなんですけど……」

『皆の所へ行こう』とか言いながら、軟禁するつもりだったの？怖っわ……怖いわこの子…』

「でも、無理やり鎖に繋がれて『止めてほしいのに…あなたを大切にしたいのに…！毎夜の爛れた時間に心も身体も疼いて、もう何も考えられない…』とか楓さん憧れるでしょー？」

「どうしてそんな子に育っちゃったの…おじいちゃん切ないわ…」
「大赦解散で、お家の呪縛から解き放たれちゃったの？抑圧からの解放なの？反動なの？」

「…まあ君たちになら満更ではないけれど」

「じゃあ良いよね♪」

「良かないわ、自分の嫁を大事にきなさい。

そも、穴は在っても自身の肉欲を満たせるような機能は積んでません。棒も無いです」

「ブーブー！」

「どんどん子供還りしてくわね貴女…可愛いからいいけど」

「…私ももう四十過ぎのおばさんなのに…まだ可愛いって言ってくれるんだね…」

「言ったろうに私は。

年齢、性別、容姿、性格、人種、種族、生物、非生物、有機物、無機物、概念、生死を問わず、私は私に『あなた達のことを好きだ』と暗示を掛け、あなた達を『好きである』と定義し、あなた達を『愛している』と私に誓いを立てた。私が誰を好くも嫌うも私の意志次第。

故に。私は貴女を愛しています。

愛しい人がどの様に在り方を転じていようとも、愛おしいのだから愛しますともさ」

「人妻口説いちゃだめだよ……………もう…」

「キリッ」

「ばかっ…！」

「そう褒められると照れてしまいますぜ、へっへっへ」

「また逢えて嬉しいよ、楓さん」

「私もですよ。園子さん」

「今度はずっと一緒だよ、楓さん」

「承知しておりますよ。園子さん」

「えへへ…//」

「ああでも、離婚の原因になりそうだったら全力で逃げますね。園子さん」

「ええっ?!」

「はっはっは」

「もうっ!もうっ!いじわるだよ楓さん!!」

「ずっとあなたの傍に居ります。あなたが死んでも私は傍に居ります。ですから其々の領分は守りましょう、線を引きましょう。お誘いはとても嬉しいですよ。園子さん」

「……………わかったよ……邪神様を起こしちゃ怖いもんね……」

「そうですね。今、邪神様が起きたら園子さんを攫って監禁しちゃいますからね。
そしてお姫様を助けに勇者たちが決起集結して私が滅ぼされて平和が訪れるのです」

「滅ぼされちゃうんだ…」

「私は死ねないだけのモヤシっ娘ですからね」

「帰って来てくれて、ありがとうね。楓さん」

「もう良いですよ。いい加減帰りましょうか、園子さん」

「そうだね」

「そうしましょう」

=====
=====
=====救え

帰結

あんたがた何処さ

肥後さ…

肥後どこさ

熊本さ…

熊本どこさ

千羽山には狸が居ってさ……

……………そいつを獵師が鉄砲で撃ってさ……………そんでき……

……………

……………

……………

……………

……………